

入居者のみなさんは小さい子が大好き。面会に訪れた子どもたちを見かけると目を細めて喜ばれます。

以前は町内の保育園児が訪問してくれる機会があり、入居者との交流が盛んに行われていました。現在ではなかなかそのような機会がないので、こちらから遊びに行くのはどうだろうと思い白川北保育園に相談したところ快く承諾していただきました。


▲負けたら、こちょこちょだよ！

保育園訪問は2日間行われ、19名の方が参加されました。当日は自己紹介に始まり、園児と一緒に体操や歌、ゲームを楽しみました。知らない体操でも園児を見ていると自然に体が動きます。握手をしたりおなかにしがみつく子どもを抱きしめる入居者のみなさんはとても嬉しそうでした。

ボールを使ったゲームでは負けた人がみんなから『こちょこちょ』されます。小さな手でくすぐられ、思わず笑い声が漏れていました。どなたも今まで見たことのないような優しい笑顔をしておられました。


▲仲良く握手、また会おうね

終わりにプレゼント交換をして「また来るね」と名残惜しそうに握手をしました。施設に戻っても「かわいかったね」「楽しかったね」と大満足のみなさんでした。今後も、こうした交流を続けていきたいです。

福祉のまちづくりフォーラム開催

サンシャイン福祉振興会と白川町社会福祉協議会は、8月27日に福祉のまちづくりフォーラムを、白川町福祉センターで開きました。

フォーラムでは、初めに大阪府阪南市長、水野謙二さんによる、「ちょうど良い田舎から、共生スタイルの創出」と題した発表がありました。

阪南市は、関西空港まで30分、大阪の中心地まで40分、和歌山市まで20分の立地にあり、豊かな里海、美しい里山、歴史ある街道と街並みある人口5万4千人余の市です。しかし、近年は人口減少と少子高齢化が進んでおり、市長は「市民は観客からプレイヤーへ」のキャッチフレーズを掲げ、住民主導による公民協働のまちづくりを進めていると述べられました。

また、高齢者の孤立や不安、不便を解消するために、空き事務所を改修して、ボアンティアが週3日開設する「おしゃべりサロン」では、1日平均35人が集い、そのうち週1日は阪南市のソーシャルワーカーが常駐。医療、介護、福祉、認知症などの悩みに対応している。このサロンからは、買物困難者のために、生鮮食料品なども売る「朝市」が生まれたことが紹介されました。

次に、県立広島大学教授、田中聡子さんから、「人口減少時代における地域包括ケアの可能性」と題した発表がありました。

要介護状態や病気の療養は、その時その時で状態が変わり、利用するサービスも変化する。自分を取り巻く専門職も増えるため、その都度情報の引き継ぎと共有が大切。医療も介護も、中心は利用者であり、分からないことはどんどん聞く。利用者は知識や情報を増やしていくことが大事であると発表されました。

最後に、東白川村保健福祉課長の伊藤保夫さんが「東白川村の外出支援サービス」と題して発表されました。平成10年にマイクロバスによる通院支援サービスがスタート。平成14年にはリフト車による高齢者等の外出支援。平成22年には、透析患者通院支援や中核病院通院支援。平成24年からは買物支援、診療所等受診サービスを開始した先進的な取り組みが紹介されました。

会場からは、発表者への質問や、福祉のまちづくりへ向けた意見も多く出され、白川町の明日につながるフォーラムとなりました。